アートプロジェクト「TAKETA ART CULTURE」（大分県竹田市、2011-18年）概括

花　田　伸　一

Outline of Art Project “TAKETA ART CULTURE”
(Taketa City, Oita Prefecture, JAPAN, 2011-18)

Shin-ichi HANADA

要　　旨

大分県竹田市において2011～18年に行われたアートプロジェクト「TAKETA ART CULTURE」（TAC）についての概括および考察を行う。

熊本県と宮崎県の県境に位置する同市は、周囲をくじゅう連山・阿蘇山・祖母山・傾山に囲まれた盆地である。天神山上に築かれた岡城で知られ、その城下町は江戸期文人画の田能村竹田や明治期の音楽家瀧廉太郎ゆかりの地でもあり、また隠れキリシタン関連の文化遺産などもある。

TAC では“日常とアートの融合”および“地域性とアートの融合”とのテーマのもと、毎年秋季に城下町エリアに点在する会場において美術・工芸の展示や関連イベント等が行われた。同プロジェクトの現代アートの分野における背景としては1990年代後半からの国内での「地域アート」の興隆があり、行政的な背景としては地域おこし協力隊制度の活用をはじめ竹田市が「農村回帰宣言市」として取り組んだ移住促進のための一連の施策があった。

本稿では主に TAC2011から TAC2018まで各年の概要と特記事項をまとめる。最後に、竹田において見られる前近代的な芸術観を挙げつつ、地域アートにおける TAC の特色について考察を加える。

■はじめに

本稿は2011～18年に大分県竹田市で行われたアートプロジェクト「TAKETA ART CULTURE」（以下「TAC」）についての概括を行うものである。

同プロジェクトの現代アートの分野における背景としては、主に1990年代後半から国内で地域における「芸術祭」や「アートプロジェクト」等のいわゆる「地域アート」と後に呼ばれる動向が盛んになってきた流れがある[1]。

本稿では主に TAC の 8 年間の活動を概括した上で、数多ある地域アートの中での TAC の特色について考察する。

佐賀大学芸術地域デザイン学部　地域デザインコース
Course of Regional Design, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

[1] 藤田直哉編著『地域アート　美学／制度／日本』、堀之内出版、2016年。

なお、筆者はTAC2017および2018には当事者として関わったほかは、2011～16年のTACは実見しておらず、本稿の内容の多くはTAC発起人のオレクトロニカによる保管資料、関係者インタビュー、末尾の参考文献から得られた情報に基づいている。

■「TAKETA ART CULTURE」とは

大分県竹田市は熊本県と宮崎県の県境に位置し、周囲をくじゅう連山・阿蘇山・祖母山・傾山に囲まれた盆地で、天神山上に築かれた岡城で知られる。城下町は江戸期文人画の田能村竹田や、「荒城の月」の音楽家瀧廉太郎ゆかりの地であり、隠れキリシタン関連の文化遺産などもある。

TACは大分県竹田市で2011～18年に行われたアートプロジェクトで、毎年秋季に城下町エリアに点在する会場において美術・工芸の展示や関連イベント等が行われた。

TACの発起人は同市を拠点に活動する美術ユニットのオレクトロニカ。オレクトロニカは大分大学教育学部で美術を学んだ2名の美術家、児玉順平（1984-、熊本県出身）と加藤亮（1984-、大分市出身）により2009年に結成された。初期には大分県豊後大野市緒方町を拠点に活動していたが、2011年より大分県竹田市に移住し、同年TACを立ちあげる。当初は近隣在住の知人の美術家に声をかけてグループ展を行う小規模なものであったが、回を重ねるごとに美術だけでなく工芸・写真・書・音楽・食なども加わって徐々に規模が拡大し、地域住民のボランティアや事務局スタッフなどの人員も得ながら2018年まで手探りで継続された。

以下、各回の概要および特記事項について記す。

■『TAKETA ART CULTURE 2011』

会期：2011年10月8日（土）～10月16日（日）　全9日
会場：竹田市城下町エリア一帯（既存店舗や空き店舗等11ヵ所）
参加作家：安部泰輔、池邉祥子、オレクトロニカ、勝正光、川村康徳、草刈樵峰、ザ・キャビンカンパニー、coje saho、他
主催：TAKETA ART CULTURE 2011 実行委員会
※平成23年度竹田市元気づくり支援事業

オレクトロニカは2011年4月に竹田市へ移住。同市が2010年7月に創設した農村回帰関連補助事業のうち「竹田市歴史・文化資源活用型起業支援事業補助金」を獲得し（第1号）、築70年の民家を改装して「gallery 傾く家」（以下「傾く家」）を2011年4月に構えた。以降、この場を拠点に展示・トーク・ワークショップ等に取り組んでいく。

同年10月に近隣在住の知り合いの表現者7組に声をかけ、「平成23年度竹田市元気づくり支援事業補助金」を獲得しながらTACを開催する。その補助金申請書に記された概要には「日常の生活にアート・美術が自然に溶け込んだ街づくりを目指す」、そして「小さな街だからできるアートプロジェクトを目指し、竹田の地域・文化に寄り添ったイベントを実現します」とある。この“日常とアートの融合”、“地域性とアートの融合”を謳う二つの方針は以降のTACでも基調をなしている。

オレクトロニカの言によればその一連の動きの

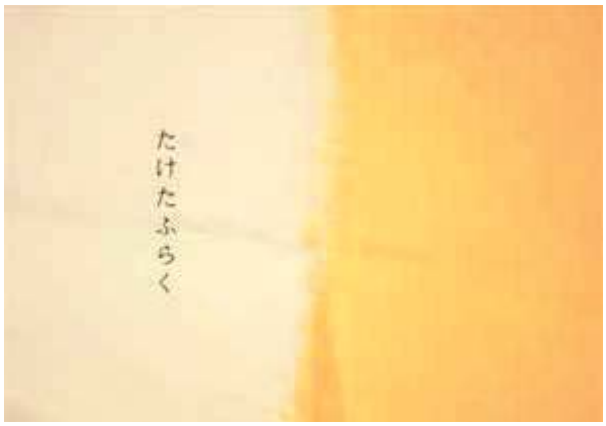
原点にあったのは彼らの内なる「衝動」であった[2]。同年３月の東日本大震災によって全国的にもたらされた焦燥感が「衝動」の後押しになったと彼らは後に語っている[3]。そのような中、竹田市が彼らの衝動の受け皿となった背景には表現者を受け入れる気質と仲間が既にそこにあったことと、さらに大きな背景として、竹田市の長湯温泉を再生させた経営者として知られる首藤勝次が2009年に竹田市長に初当選し、「農村回帰宣言市」を掲げ、取り組んだ諸々の施策もあった。後述する「地域おこし協力隊」による文化芸術振興策もそれに含まれる[4]。

■『TAKETA ART CULTURE 2012』

会期：2012年10月６日（土）～21日（日）　全16日
会場：竹田町商店街周辺（既存店舗や空き店舗等15ヵ所）
参加作家：高橋英明×uwe hass×穴井佑樹、GOTO AKI、RAD×松延総司、ザ・キャビンカンパニー、オレクトロニカ、草刈樵峰、中臣一、et in terra pax、有村肯哉、トナリマチ、野副一喜、千尋トリオ with クロミー、丸井庸介
主催：TAKETA ART CULTURE 2012 実行委員会
※第14回大分県民芸術文化祭地域文化行事、平成24年度竹田市元気づくり支援事業

初回2011年も美術だけでなく服飾・書・絵本などと多分野に渡っていたが、2012年には小笠原瞳氏（当時読売新聞熊本支局記者）から紹介された表現者含め、朗読劇・音楽ライブ・カフェなど更に幅が広がった。表現活動だけでなく、「傾く家」で竹田名産の「サフラン」をテーマとしたカフェを開く、RAD×松延総司が竹田の土産物に着目したプロジェクトに取り組む、竹田市企画情報課が市のエコミュージアム構想紹介ブースを構える、などの点に「アート」と並んで「カルチャー」を謳うTACらしさが見られる。

■『たけたふらく2013』



会期：2013年10月５日（土）・６日（日）　全２日
会場：竹田市城下町エリア一帯（店舗やアトリエ等８ヵ所）
参加作家：中臣一、岩田淳子、谷口倫都、草刈淳、ヨシダキミコ、尾込真貴子、辻岡快、桐山浩実、中村秀利、Kim Byoung Moon、ザ・キャビンカンパニー、オレクトロニカ、baobab
主催：TAKETA ART CULTURE 実行委員会

2013年はTACではなく「たけたふらく」のタイトルで開催。その名称は難攻「不落」の名城と称えられた岡城に由来する。TAC2011、TAC2012が多分野の活動を含みつつ「美術」を中心に展開されたのに対して、2013年は「モノ作りとマチ歩き」をキャッチコピーとして特に「工芸」に重点が置かれ、会場も店舗やアトリエにしぼって開催された。前年と同じく音楽ライブや食も含みつつ、全体的にはコンパクトにまとまり、より日常に溶け込む形で展開された。

[2] オレクトロニカ「TAKETA ART CULTURE を振り返って」『竹田アートカルチャー2018　美術展「昼と夜」』記録集、竹田アートカルチャー実行委員会、2019年、44-45頁。
[3] 山下里加「新しい人材と地元住民が繋がることでまちの未来図を描く」『地域創造』2018 Spring vol. 43、一般財団法人地域創造、７頁。
[4] 前掲書、５頁。

■『TAKETA ART CULTURE 2014 くぐりくぐる』

会期：2014年９月の土日祝＋22日（月）　全11日
会場：竹田市城下町エリア一帯（既存店舗や空き店舗等21ヵ所）
プログラム：アート／クラフト／ライブ／食／ワークショップ／スタンプラリー
招待作家：安部泰輔、Overture、猿山修
作品展示（ワークショップ／販売含）：岩田淳子、オレクトロニカ、尾込真貴子、甲斐哲哉、草刈淳、桐山浩実、新本聡、高木逸夫、高木康子、谷口倫都、辻岡快、中臣一、中村秀利、長谷川絢、山本哲也×飯川友紀子、ヨシダキミコ
音楽：大口沙世、baobab
ワークショップ：ザ・キャビンカンパニー、山折典子
食：cafe　grandpa、かどぱん、但馬屋老舗、Taverna　e Botanica Sui.Sai.　、菜々人×三桁
主催：竹田アートカルチャー 2014 実行委員会
※平成26年度大分県地域活力づくり活動支援事業、平成26年度、竹田市市民提案型地域活力創造事業

竹田市は2014年に美術家や工芸家含む14人を「地域おこし協力隊」[5]として採用した。その一人に、横浜トリエンナーレ事務局、取手アートプロジェクト事務局、NPO 法人 BEPPU PROJECT 等、アートマネジメントの現場を経験してきた澤田知美がおり、2014年以降 TAC 事務局の中心的役割を担う。

2014年から TAC は規模が一気に拡大した。地域ボランティアのサポートも得ながら、TAC2014では約20組の展示に加え、10件のワークショップ、５件の食プログラムほか、音楽ライブ・トーク・スタンプラリー等が行われた。また会期終了後の11月29日（土）に音楽ユニット「mama!milk」とオレクトロニカのコラボレーションによるライブを行うなど、TAC を秋季に限った非日常的なイベントとしてだけではなく、会期以外にも年間通じて日常的に浸透させていこうとする試みが本格化する。その一つが2014年に招聘した猿山修とその後2017年以降取り組むことになる「猿竹工芸商會」プロジェクトへと繋がっていく。

■『TAKETA ART CULTURE 2015 暮らし／衣食住』

会期：2015年９月12日（土）～10月３日（土）の土日祝　全10日
会場：大分県竹田市城下町一帯（15ヵ所程度）
プログラム：アート／クラフト／食／ワークショップ
招聘作家：木村崇人（美術家／滞在制作［９／８～20］・展示）、中村好文（建築家／講演会）
参加作家：飯川友紀子、岩田淳子、岡崎真悟、甲斐哲哉、ザ・キャビンカンパニー、草刈淳、上妻勇太、斎藤藍、志水聡香、新本聡、高木逸夫、高木康子、竹田料理男子、谷口倫都、TODAKA WOOD STUDIO、辻岡快、中臣一、長谷川絢、藤本健、山折典子、山本哲也、ヨシダキミコ、他
主催：竹田アートカルチャー実行委員会
※平成27年度大分県地域活力づくり活動支援事業

TAC2015では安部泰輔（TAC2011・TAC2014参加作家）の紹介で木村崇人（1971-、美術家）を招聘し、滞在制作および展示に取り組んでいる。また例年の展示やイベントに加え、中村好文（1948-、建築家）による講演会や、中西義昌（1973-、元竹田市立歴史資料館学芸員、当時北九州市立自然史・歴史博物館学芸員）による歴史講座など、2015年は外部の専門家を招いてのプログラムが充実する。ほか、オレクトロニカが「傾く家」にてシェーカー家具に関連する展示を行うなど、美

[5] 鳩山邦夫総務大臣による2008年「地域力創造プラン」の柱として2009年に総務省が制度化。総務省による特別交付税措置を受けて地方自治体が都市部からの地域おこし人材を受入れ一定期間、地域協力活動を委嘱する制度。農林水産業・環境・医療・福祉・観光・教育・文化など、人材の受け入れ方や活動内容は自治体によって異なる。

術・工芸・建築・歴史の各分野において、TACの活動をより専門的な視点から掘り下げながら、地域の日常へと接続しようとする姿勢が見られる。

■『TAKETA ART CULTURE 2016 ニュータケタ』

会期：2016年11月12日（土）～27日（日）の土日　全６日
会場：大分県竹田市城下町一帯（27ヵ所程度）
プログラム：展示／茶会／コンサート／トーク／ワークショップ／プロジェクト／食／夜のプログラム／スタンプラリー
招聘作家：mama!milk（音楽ユニット／オレクトロニカとのコラボレーション展示）、馬場正尊（建築家／講演会）
参加作家：阿部麻海、新井真之、井上愛仁、岩田淳子、運天達也、筬島孝一、オレクトロニカ、甲斐哲哉、沈露露、新本聡、中島信男、中臣一、中西美香、中山秀斗、原田陽子、松井知恵美、山田俊吾、山本哲也、他
主催：竹田アートカルチャー実行委員会
※「第33回国民文化祭・おおいた2018」・「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」キックオフイベント

TAC2016は既存の竹灯篭イベント「竹楽」に時期を合わせて11月に開催。タイトルの「ニュータケタ」はかつて城下町の中心にあったデパート名「ニュー竹田」に因む。事務局スタッフには2014年からの澤田のほか、cafe & gallery Grandpa のオーナーで TAC2011から展示やイベントで関わりのある西田稔彦が新たに加わった。

前年同様、外部専門家によるプログラムとして2016年１月23日（土）馬場正尊（1968-、建築家）によるトーク＆ミニワークショップ「RePUBLIC TAKETA」の開催を皮切りに、２月には骨董イベント「たけたふるもの」[6]、６月にはカフェイベント「たけた珈琲日和」[7]、12月にはトーク＆ワークショップ「竹田幽閉」[8]など、2016年には秋季の会期外のプログラムが目立つ。

TAC2016会期中の特筆すべき点として、音楽ユニット mama!milk とオレクトロニカの共同制作によって TAC 中おそらく最大規模のインスタレーション作品が廣瀬神社境内に設置されたほか、夜間限定プログラム「Night ART CULTURE」が１日限りでなく会期中継続的に行われたことを挙げておきたい。

また2016年からアーツ・コンソーシアム大分[9]による大分県内のアートプロジェクトの試行評価が開始され、以降、TAC に関する調査所見も報告書にまとめられている。

■『TAKETA ART CULTURE 2017 生き、還る』

会期：2017年10月14日（土）～29日（日）の土日　全６日ほか
会場：大分県竹田市城下町エリア一帯（約10箇所）
プログラム：プロジェクト（デザイナー・猿山修×竹田市在住クリエイター協働プロジェクト、キュレーター・花田伸一×竹田市在住アーティスト協働プロジェクト）／展示／トーク／ワークショップ
参加作家：運天達也、尾込真貴子、オレクトロニカ、釘宮彩、草刈淳、草刈樵峰、鹿野貴司、竹内貴誉詞、竹田高校書道部、仲道裕馬、中西美香、西田稔彦、宮城壮一郎、森貴也、森山楓、よしいいくえ、吉田耕平、山田俊吾、山本哲也、他

[6] 会期：2016年２月６日（土）～14日（日）の土日（全４日）。会場：coto、オレク倉庫、古物三桁、咲う花 WARAUHANA、gallery 傾く家、月函　※平成27年度大分県地域活力づくり活動支援事業
[7] 会期：2016年６月18日（土）～７月３日（日）の土日（全６日）。会場：cafe & gallery Grandpa［ことり珈琲（国東市）］、gallery 傾く家［カフェゲーテ（竹田市久住白丹）］、かどぱん［豆岳珈琲（中津市耶馬渓）］、但馬屋老舗茶房だんだん［はしもと珈琲／イノダコーヒー（京都市）］、Osteria e Bar RecaD［焙煎ログへつぎ（豊後大野市）］、月函［小さな作陶室＋展示室＋図書室］
[8] 会期：2016年12月26日（土）・27日（日）。会場：竹田市立図書館・たけたから。ゲスト：新見隆（公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団理事兼美術館長）
[9] 大分県の長期総合計画「安心・活力・発展プラン2015」に基づき政策の柱である「芸術文化による創造県おおいたの推進」の持続可能な体制を構築するため、大分県、大分県立芸術文化短期大学、公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団の三者からなる共同事業体組織として2016年６月に発足。

主催：竹田アートカルチャー実行委員会
＊「第33回国民文化祭・おおいた2018」・「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」プレイベント

2017年の大きな動きとしては、外部の専門家と竹田在住の作家との協働プロジェクトがスタートし、工芸デザイン分野では猿山修（1966-、デザイナー）が、アート分野では筆者がアドバイザーとして関わった。それぞれ１年間かけて外部の専門家と活動をともにすることで竹田在住作家のスキルアップを図るねらいで、TAC2017では2018年の本格的な展示に向けてのプレイベントとして小展示、座談会、町歩き＆クロストーク等のプログラム等が行われた。

またTAC2015滞在作家の木村崇人（山梨県早川町在住）の繋がりから、鹿野貴司（1974-、写真家／山梨県早川町在住）が2017年夏に竹田に滞在し、地元の写真館や竹田高校の協力を得て制作した作品を10月に展示するなど、2017年には外部の専門家が長期スパンで竹田に関わる活動が多く見られた。

TAC事務局の変化としては、九州大学芸術工学研究院藤原惠洋研究室で文化政策・アートマネジメントを学び竹田に取材した修士論文を認めた吉峰拡が、2017年４月から地域おこし協力隊として竹田市に移住し、市の文化事業に携わる傍ら、TAC事務局の一翼を担いはじめた。

■『竹田ルネサンス2018 TAKETA ART CULTURE 2018「昼と夜」』

会期：2018年10月６日（土）～28日（日）の土日祝　全９日ほか
会場：大分県竹田市城下町エリア内約20箇所ほか
プログラム：「猿竹工芸商會」（デザイナー・猿山修×竹田市在住クリエイター協働プロジェクト）、美術展「昼と夜」（キュレーター・花田伸一×竹田市在住アーティスト協働プロジェクト）、「竹田アート茶会2018　淡楽雅遊」、招聘プログラム（宮本博行）、公募プログラム（９企画）
「猿竹工芸商會」参加作家：井上愛仁、豊田豪史、中西美香、西村和宏、小河眞平、中村秀利
美術展「昼と夜」参加作家：牛島光太郎・オレクトロニカ・森貴也・森山楓・山本哲也
「竹田アート茶会2018　淡楽雅遊」参加：光浦高史、甲斐哲哉、匹田貴明、ヨシノヒトシ、新見隆、岩尾晋作、草刈淳
招聘・公募プログラム参加：宮本博行、阿部麻海、志水聡香、枡田紘平、ヨシノヒトシ、尾込真貴子、中山秀斗、東浩章、横山修、竹田高校書道部・仲道裕馬・草刈樵峰、小川眞平、月亭太遊
主催：文化庁、厚生労働省、大分県、大分県教育委員会、竹田市、竹田市教育委委員会、第33回国民文化祭大分県実行委員会、第18回全国障害者芸術・文化祭実行委員会、第33回国民文化祭・第18回全国障害者芸術・文化祭竹田市実行委員会、竹田アートカルチャー実行委員会
＊第33回国民文化祭・おおいた2018、第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会

筆者は2017年に続いて「竹田市在住アーティスト協働プロジェクト」のアドバイザーとしてTAC2018において美術展「昼と夜」を監修した。「昼と夜」とのタイトルは筆者が美術展のために提案したものが結果的にTAC2018の全体テーマとして援用されたもの。同タイトルに込めた趣意も含め、美術展「昼と夜」の詳細に関しては記録集『竹田アートカルチャー2018　美術展「昼と夜」』にまとめた。

「竹田ルネサンス2018」の名称は、「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」関連で大分県内各所にて展開されたプログラムのうち、竹田市における事業全体に冠されたもの。TAC2017およびTAC2018は国民文化祭による予算的な後押しもあり、それまでのTACに比べ規模的には拡大しているものの、皮肉なことに国民文化祭の大きなうねりの中でTAC2018の対外的な発信力は相対的に薄まった感が否めない。

TAC2018最終日10月28日（日）のクロージングイベントにおいてTAC発起人のオレクトロニカから2018年をもってTACを終了する旨が発表され、2011年から８年間継続されたTACはここに幕を閉じることとなった。

ところでTACに関する活動記録をまとめた印刷物としては今のところ、部分的には記録集『竹田アートカルチャー2018　美術展「昼と夜」』、そして全体的には本稿のみである（2019年３月現在）。ほか、主催者側による情報としてパブリックにアクセスできるものはTACのウェブサイトに残された開催当時の情報のみに限られるので、今後TAC情報の更なるアーカイヴ化が待たれる。

■「TAKETA ART CULTURE」の特色

ここまでTAC８年間の活動を概観した上で、改めて国内の地域アートの中でTACの特色について考察してみよう。

まずは美術家主導によって始まり、企画運営されている点はTACにおいて大きな要素であるに違いないが、そのこと自体は特に珍しいことではない。また美術のみならず工芸・音楽・食など種々の分野が同時に展開されるのは他地域でもよく見られるし、“日常とアートの融合”、“地域性とアートの融合”とのアプローチも独自のものとはいえないだろう。交通アクセスの不便さや情緒ある城下町を舞台とする点も地域アートにあっては特に竹田でしか見られないというものでもない。

TACの特色は、一つには地域おこし協力隊の存在感にある。竹田市では移住促進策の一環として地域おこし協力隊制度を利用し、2010年２名、2014年18名、2015年14名、2016年14名、2017年17名を採用した。募集の際、観光や畜産など活動内容が指定された一般枠と、自身の経験や知識を活かし自由に活動させる企画提案枠の２枠を設け、後者枠で美術家、工芸家、マネジメント人材などを多く採用している。

また竹田市では旧竹田中学校校舎を改装して「TSG竹田総合学院」（以下「TSG」）を2014年４月にオープンし、創作活動支援の場として提供していることも美術家や工芸家の移住を後押しする要因の一つとなっている。

このように移住促進策において、とりわけ地域おこし協力隊制度において、美術工芸に携わる人間を重用する点はあまり他に見られない独自の取り組みといえよう。

2010年頃から竹田市には美術家や工芸家の移住者が増えはじめたが、2010年に「竹田市歴史・文化資源活用型起業支援事業補助金」第１号を取得して竹田市に移住してきたオレクトロニカはその端緒であり、TAC参加作家には地域おこし協力隊員やそのOB·OG、またTSGをきっかけとする移住組が少なからず含まれる。

運営面では、2011～13年のTAC運営は発起人であるオレクトロニカが主に担ったが、2014年以降は澤田や吉峰らのアートマネジメント人材が地域おこし協力隊として竹田市に移住し、TAC運営に加わったことで規模や内容に変化が見られた。

このようにTACの大きな背景としては「農村回帰宣言市」を掲げた竹田市による地域おこし協力隊制度の積極的な活用を含む施策があり、TACはその恩恵を受けながら成り立ってきたといえるだろう。

しかしながらTACの特色を行政の施策にばかり帰するわけにもいかない。行政は支援の仕組みを作りはするが、中身を作るのはオレクトロニカはじめ参加作家や現場の運営メンバーたちである。

先に、美術家主導であることは特に珍しくなくTACの特色たりえないと記したが、とはいえオレクトロニカの美術家としての活動に関して筆者の目には不可解な点がある。彼らは大学で彫刻を専攻したものの、研究室では可能な限りあらゆるメディアを一通りこなせることが求められたという。その影響もあってか、彼らの活動は美術のみならず、家具、空間演出、骨董、カフェ、イベント企画運営など、多岐に及ぶ。

分野を越境するとはいえ、1960年代の前衛美術家がマンガや小説を書きはじめたり、1980年代の表現者が戦場をイラストレーションの分野に求めたりする姿勢とも異なる。様々なメディアが結果的に一つの作品上で収斂されるわけでもない。オレクトロニカは多岐の分野にわたる活動を“同時並行”的に行い、それらを“主従なく”等価に自らのプロフィールに記す。

1972年生まれの筆者から見るに、その「等しく何でもやる」身振りはおそらく我々の世代までは「節操無い」「一貫性が無い」「プロ意識に欠ける」として手厳しく非難されるものであるが、2017～18年 TAC に当事者として関わった実感としては、彼らの身振りを「節操無い」云々と切って捨てるのは短絡に過ぎるように思われた。

「等しく何でもやる」身振りへの違和感の正体はおそらく私が身に着けた西洋近代芸術の価値観に由来している。すなわち美術にしろ音楽にしろ詩にしろ、各メディアの固有性を強く意識し、一つのメディアの可能性をとことんまで追及することをもって良しとする価値観だ（脱線するが、この価値観と終身雇用・年功序列制とは通底するのではなかろうか）。

それに対し、竹田ではオレクトロニカに限らず、竹田出身の表現者たちが、いや、表現者だけでなく一般の生活者も含め、プロアマの区別なく一人の人間が書道、絵画、音楽、空間造形、料理、イベント企画、あれもこれも相応のクオリティで手掛け、さらにどれが主でどれが副との区分も特に意識していない、という場面を多く見かけた。

時代を遡ってみると竹田ゆかりの田能村竹田はじめ江戸期の文人たちは、深い教養を身につけ文雅に親しむ中国の士太夫を崇敬した。また彼らは職業画家の職能としてではなく余技としての技芸に心を遊ばせる趣味人であった。琴棋書画を等しく愛し、詩書画三絶を旨とする文人たちの身振りを我々は「節操無い」「一貫性が無い」「プロ意識に欠ける」と切ることができるだろうか。

江戸期文人たちの価値観が現在の竹田にも息づいているのだと結論づけるには拙速だが、この「等しく何でもやる」ことを良しとする竹田の土壌とオレクトロニカの身振りとが共鳴しあいながら、TAC は醸成されたのではなかろうか。

ジャンルの区分、プロアマの区分、営利と非営利を線引きせず、複数の価値が並び立ち中心を定めない。２人の美術家によるオレクトロニカのユニット活動に指摘できるこれらの特色は、その表現活動の延長たる TAC でもそのまま指摘できるのである。

ひとまずの結論として、TAC の試みは、大きくは行政の移住促進策に後押しされながら、1990年代後半以降の地域アートのフォーマットに則りつつ、江戸期の文人に代表される前近代の芸術観に通底する実験的な営みが竹田の地において展開されたものとして見ることができよう。

我々がその先に見据えるべきはアートとカルチャーの区分にいまだ縛られない前近代の文人たちが心遊ばせた理想郷と現代社会との接続点ではなかろうか。

■参考文献

・「第５章 TAKETA ART CULTURE の評価」『平成28年度アーツ・コンソーシアム大分構築計画実績報告書～創造県おおいたの推進体制構築に向けて～』、アート・コンソーシアム大分、2017年３月、48-54頁
・「第５章 TAKETA ART CULTURE の評価」『平成29年度アーツ・コンソーシアム大分構築計画実績報告書～クリエイティブな文化と評価へ～』、アート・コンソーシアム大分、2018年３月、44-49頁
・山下里加「新しい人材と地元住民が繋がることでまちの未来図を描く」『地域創造』2018 Spring vol. 43、一般財団法人地域創造、４-10頁
・『竹田アートカルチャー2018　美術展「昼と夜」』記録集、竹田アートカルチャー実行委員会、2019年